

1・春（午前9時頃）

明かりが入ると、ここは有限会社「WALK」の事務所兼倉庫。

「WALK」は、いわゆる広告（チラシ）のポスティング会社。

宅配ピザ、宅配寿司のチラシや、不動産のチラシをポストに投函する仕事を請け負っている。

上手（下手でもよい）に社長の机があり、上手奥に、住居に繋がる部屋への出入り口がある（二階に通じる感じでもよい）。

下手（上手でもよい）に、アルバイトが出入りする入り口。

社長の机の他には、大きめのテーブルがひとつ（段ボールが積み上げられている）。丸椅子がいくつか。可能ならコピー機が欲しいが、

無理なら、パソコン（プリンターなども）を一台置きたい。

そして真ん中あたりに粗末なソファセット。

とにかく段ボールの数がすさまじい。

空間は、段ボールで埋め尽くされていると言っても過言ではない。

その中には、もちろんポスティング用のチラシが入っている。

ソファに高梨元気が座っている。

奥のテーブルのところで、社長の笠井陽一が地図を広げながら、井

坂夢子と村中三郎に話をしてる。

隅っこに花田信介が座って、携帯をいじっている。

陽一 「えーと、今日は夢子さんは、4丁目と5丁目お願いできるかな。いつものピザ。」

夢子 「うわー、坂ばつかりのどこ。きつついなあ。」

陽一 「ごめんねえ。それで、村中さんは、2丁目。」

三郎 「2丁目。480軒くらいですか。了解。」

陽一 「あそこに、チラシあるんで。そう、それ。それからピザのは・・・(探し始める)。」

陽一、ピザの広告の入ってる箱を見つけるが、別の箱の下にあつて結構大変そうである。

夢子と三郎もそれを手伝う。手伝いながらの会話。

夢子 「ちよつと、サブさん、交換しようよ、場所。」

三郎 「僕は不動産広告専門だから、アパートやマンションには配りませんよ。」

夢子 「そっかー。それじゃ稼げないしなあ。」

三郎 「僕は健康のためにやってるだけですから、1日500軒以上は配らな

「いので。」

夢子 「いいなあ、悠々自適で。」

三郎 「そういうわけじゃありませんよ。」

夢子 「ほんと、サブさんの生活って謎。ちゃんと仕事とかしないの？」

三郎 「これもちゃんとした仕事じゃないですか。」

夢子 「そうだけど、これだけでやっていけるのかなって。」

三郎 「若い時に働きすぎましてね、今はのんびりと。はい。」

夢子 「ほんと大金持ちとか？豪邸に住んでるとか？」

三郎 「そんなわけではないよ。ただの淋しい独身男。」

夢子 「私や、しっかり配って稼がないと。また旦那の稼ぎが減っちゃって。」

三郎 「大変だ。」

夢子 「クビにならないだけマシだけど、牛島ちゃんみたいだね。」

三郎 「牛島さんは、クビじゃなくて、会社そのものがなくなっちゃったんです。」

夢子 「そうだったけ？まあ、どっちでも同じようなもんだけどさ。しかし、小遣い稼ぎとダイエツトがたら、この仕事始めたのはいいけど、ちっとも痩せないし、稼ぎも少ないし……。」